



第15号
 (発行所)
 真宗大谷派
 松岡山 廣讚寺
 中村区城屋敷町3-30
 TEL (052) 411-5301
 FAX (052) 411-5341

介護抄 その(二)

『慣れっこで 気付かぬふりして あぐら組み』

たどたどしい言葉で夫が要求する。またかと私は聞こえぬ
 ぶりだ。どこかですまぬなーとの気持ちもあるが、私は疲れ
 ている。夫は小さい声で繰り返す同じことを言う。こちらに
 届いていないと思っているらしい。そうした所作に心は傾く
 のだが、私はしらぬ顔だ。そして一呼吸おいて空返事をする。
 『問いかけに ハイハイハイと 返事だけ』
 二人が健康であり仕事にいそしんでいた、かつての私たち
 の生活でこのようなことはなかったのと思う。

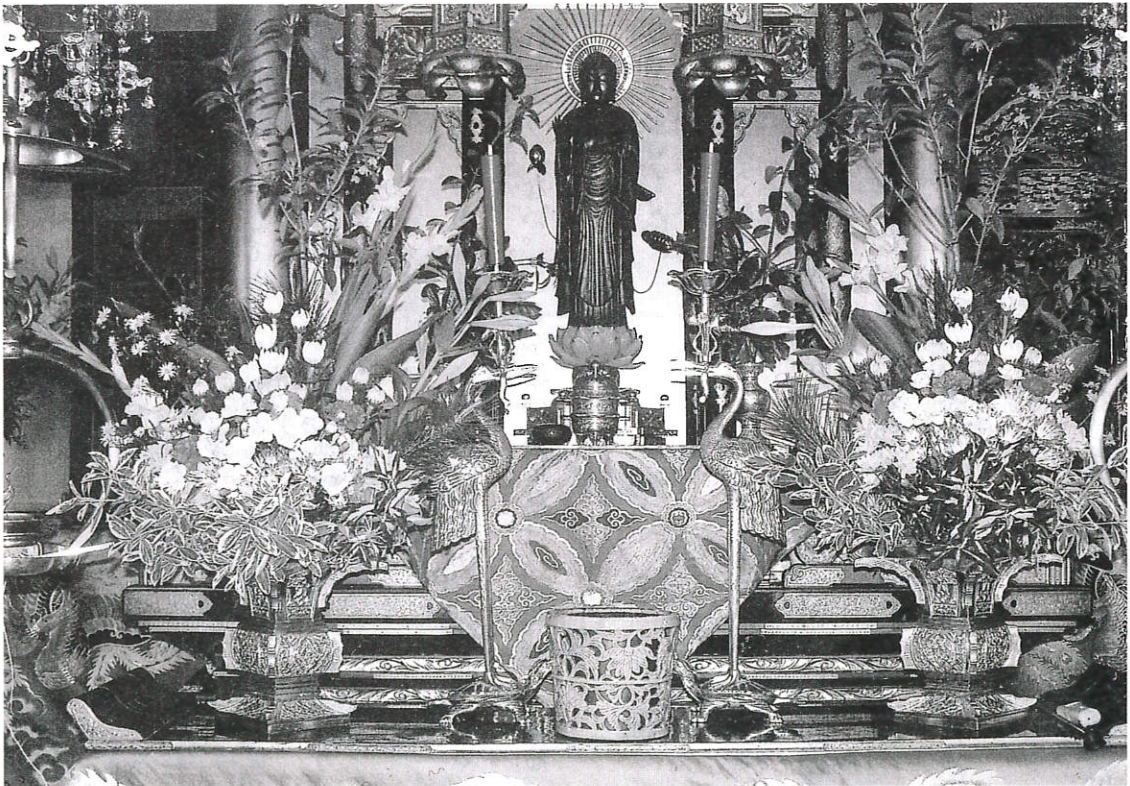
『今日明日へ つづく心も いきている』

人間の一生なんて不思議なものさ。誰かの言葉ではないが、
 たった六十年にみたない私のこれまでの人生の起伏も計り知
 れないことが多い。

『女性の平均年齢は八十五歳』

それに向かつて駈々と進みつつある自己をみつめる。

『人間と人間 このすきまうめてよと 仏様』
 合掌する。



聖人のおことば

『かなしみに かなしみを そふるやうには
ゆめゆめとぶらふべからず もししからば
とぶらひたるにはあらで いよいよわびしめ
たるにてあるべし 酒はこれ忘憂の名あり
これをすゝめて わらふほどになぐさめて
さるべし』

自分なりに口語訳する。

「葬式とかお通夜に訪れた時のあいさつとしては、悲しんでみえる先方さまをさらに悲しめるような言葉は慎むべきである。お酒は悲しみや愁いを忘れさせる薬ともいわれるから、一升でも提げていって飲みながら相手を勇気づけて、相手の顔がほころびるように心がけるべきである」

繰り返し繰り返し読んでいるうちに次のような思いが湧出してきた。

本願寺を支えているのは確かに一文不知のともがらである。そしてちよつと飛躍しすぎるが、大トヨタの富を支えていたのは、高級社員でなくして派遣の方々であったのだと。

封建社会の末端階層に光り輝いた念仏がいとおしくてしようがない。ここ一揆の里に私はいま立っている。

さくら

さくらさくら今年もさくらは立派に咲いた。

王朝のさくらは人情に咲いたが、昭和のさくらは戦場に散った。さくら。戦争。戦死。日本男子。大和乙女。靖国。軍歌と連鎖して、さくらは一時軍国の代名詞でもあつて迷惑したことだろう。

「日本の名曲」とか「こころの歌」とかテレビの番組に

いろいろ登場する無数の歌曲のうち東西の横綱は、国歌
君が代と童謡のさくらだと思う。

三歳の童女も歌い八十歳の祖母も歌う。愛されたさく
らがいついつまでも平和の歌であってほしいものだ。

道について(二)

その昔庄屋であった両I家の間を通って、西に進む道
がある。西隣は地藏堂である。道光尼さんがみえてお釈
迦様の二月十五日・四月八日に甘茶や五色の餅もちを頂いた。
おいしいとは思わなかったが、子供の旺盛な食欲でむし
やむしやと頂いた。その西隣に秋葉神社があった。旧稲
葉地分校の跡地で広々としていた。一本の老松がそびえ
四つ葉のクローバーが茂っていた。現在は家々が立ち並
んで秋葉社も小さくなった。夜中までのたき火もできな

くなって寂しいものだ。ここで煙にむせびながら焼いた
「さつまいも」の味が懐かしい。

かつての村々をつないだ道は鎌倉街道と呼ばれた。こ
の道もそのように呼ばれ、くねくねまわって東宿へとつ
づいていた。この道を通って私は中村小学校
まで通った。

中村小学校は
今も昔もその
ままであるが、
校舎のすべて
は近代化され
てしまった。
ただ、南側から
の道は昔のまま
で、
ここが正門であつた。



※行事予定 (六月)

六月 十三日(土) 七時 同朋委員会・例会

十九日(金) 二時～四時 学習会

二十八日(日) 十時 二十八日講・女人講



復興永代経 午後の芸能大会

※行事予定 (七月)

七月 十一日(土) 七時 同朋委員会・例会

十九日(日) 二時～四時 学習会

十九日(日) 六時半 納涼大会

金魚すくい・輪なげ・

ビンゴ大会など…

楽しい催しものがいっぱい。

どなたでもご参加下さい。

二十八日(火) 十時

二十八日講・

女人講

